

1 学校教育目標

将来の自立や豊かな生活を実現するために、一人一人の児童生徒の教育的ニーズに応じた最適な指導・支援を行い、主体的に学び、取り組む子どもを育てる。

2 本年度の重点目標

- (1) 自立と社会参加に必要な力を身につけ「学び・決め・かかわる」子どもを育てるために専門性の向上を図り、授業改善やカリキュラム・マネジメントに職員一人一人が主体的に取り組む。
- (2) 安心・安全な学校、魅力的な学校を目指し、保護者・地域・関係機関と信頼関係のもと取り組む。
- (3) 職員が一体となって業務改革に取り組み、互いの持ち味を生かし支え合う職場にする。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	地域とともにある学校づくり(総合型CS)	今後の熊支像を踏まえ、教育目標、「育てたい力」、教育課程等について、保護者をはじめとする関係者に説明・共有し協働した実践(カリキュラム・マネジメント)	・保護者に学校教育目標や運営方針等について説明し、学校評価アンケートで80%の理解を得る。 ・総合型CSの取組をとおして今後の熊支像を踏まえた協議を行い、委員や保護者からの本校教育への期待などを学校運営に反映させる。	・PTA評議員会、学部・学年懇談で校長から学校運営方針を説明し、学校便り等をとおして学校教育目標を踏まえた実践を保護者に情報発信する。 ・今後の熊支像を踏まえた取組については総合型CS及びPTA評議員会、職員会議で協議の場を設け今年度の取組に反映させる。	B	・PTA執行部会、PTA評議員会等、機会を捉えて学校の取組について説明した。学校評価アンケートでは80%以上(87.5%)の理解を得ることができた。 ・学校運営協議会では地域との関わりについて意見をいただいた。新型コロナウイルス感染症の影響で地域と共に活動する機会が少なかったことが課題であった。
	安心・安全な学校づくり	「子どもたち一人一人を大切にした学校づくり」に基づく確実な実践	・児童生徒が安心して学校生活を送る様子を保護者に発信し、学校評価アンケートの評価で80%以上の理解を得る。	・感染防止に配慮しつつ、学部・学級に応じた授業参観週間を設ける。また、学校評価アンケートは前期・後期それぞれ1回実施し、保護者や職員の意見を生かし取組を改善する。	B	・感染防止に配慮しつつ、ゆうし祭への保護者の参加、学部・学級に応じた授業参観週間を実施することができた。 ・学校評価の結果を分析し、分掌部、学部ごと等、担当部署ごとに対応することができた。
	状況に応じた柔軟な感染症予防対策による学校安全体制づくり	状況に応じた柔軟な感染症予防対策による学校安全体制づくり	・昨年度作成したチェックリストやマニュアルに沿って、感染症対策を徹底する。 ・マニュアルが実態に合っているか評価、改善を分掌部会で学期に1回以上行う。	・『感染症対策チェックリスト』『学校給食配膳下膳マニュアル』『教室等の消毒マニュアル』を職員へ周知徹底する。 ・適宜学校医等と相談し、マニュアルの改善を行い、実態に合わせた感染症対策を行う。	B	・作成したマニュアルに沿って必要な感染症予防対策の内容を適宜学部会等で連絡し、周知徹底を図った。昨年度作成した給食配膳下膳チェックリストを現在も実施し感染症予防に努めている。 ・感染症対策について分掌部会等で意見を聞き、必要な改善ができるようにした。学校保健給食委員会等で学校医等の助言を聞きながら、感染症対策を行った。

		職員の危機管理意識の向上	不祥事の防止に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> ・朝会等の際に不祥事に関する情報提供を行う。 ・不祥事防止研修等を行い、職員の意識の向上を図る。 ・各職員が行動目標を意識した取組を進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・朝会等の際に不祥事等に関する情報を共有することができた。 ・特別支援学校マネジメントアドバイザー等を活用した職員研修を実施し、職員の意識の向上につなげることができた。 ・行動目標を振り返る研修を学期末に実施し、職員間で意見交換を行うことができた。
	業務改善 働き方改革	全職員による風通しの良い職場づくり、モノ・業務内容・環境のスリム化・効率化	<ul style="list-style-type: none"> ・時間外勤務時間の年間平均を30時間以内にする。 ・分掌組織の改編の効果や更なる改善の方策について全職員で見直し、学校全体で取り組んでいるという職員の評価を60%以上にする。 ・保護者に働き方改革についての説明を行い、メールによる欠席連絡、電話対応時間の設定等を進めていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・月45時間以上超過勤務職員への業務の片寄りや業務内容の方法・必要性について上期における衛生委員会、運営委員会で整理し、下期に改善していく。 ・夏季休業中に学部・分掌部においてスリム化案を出し、下期に向けて改善する。次年度に向けた改善にも取り組む。 ・安心メールを活用した欠席連絡を進める。 ・18時以降は留守番電話対応にする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・職員数が不足していることや新型コロナウイルス感染症への対応業務等があり、時間外勤務の削減をすることができなかった。 ・会議の精選や短縮授業の実施、各学部や分掌部ごとの改善等、取組を進めているがさらなる改善が必要である。 ・安心メールを活用した欠席連絡を進めることができた。 ・18時以降は留守番電話対応にすることができた。
授業の 充実	新学習指導要領を踏まえた教育課程の改善	新学習指導要領の教育内容を踏まえた年間指導計画、授業実践体制の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・新学習指導要領を踏まえた「学習指導要領実態把握シート」を実態把握や学習評価に活用する。 ・「各教科内容表」と連動した年間指導計画の様式を運用し、計画的に目標設定、指導及び評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校教育の手引に沿って「学習指導要領実態把握シート」を活用する。 ・年間指導計画に基づいた授業実践について7月と12月に教育課程評価アンケートを実施し実践の検証と教育課程の改善に取り組む。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・実態把握シートの捉え方が様々あり、整理が必要だと感じている。R5年度には校務支援システムの導入もあるため、研究部、教育支援部等とも連携しながら準備をしていきたい。 ・各教科内容表、年間指導計画、評価シート等を連動させた実践は定着してきていると感じる。教育課程検討については、次年度から学校教育目標を意識した検討ができるよう検討する内容は変えず、順番を入れ替えて実施する予定。
	「育てたい力」の育成につながる授	「育てたい力」を高める「主体的・対話的で深い学	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が見方・考え方を働かせ、「主体的・対話的で深い 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月2回のグループ会や年4回の教科部会を設定し、十分な授業検 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教科部会での授業検討を経て、83%の割合で『「育てたい力」を育む授業実践ができ

	業改善	び」を実現する授業づくり	学び」を実現できる授業づくりを行う。 ・授業に関するアンケートの『児童生徒に「育てたい力」を育む授業実践ができたか』の項目で、「十分できた」、「できた」の評価を全職員の70%以上から得る。	討や授業評価ができるようにする。また学習評価をデータ化することで、一定期間で総括した達成状況を把握できるようにし、授業改善に生かせるようにする。		た』と回答を得られた。外部講師からの指導助言を求める等、授業の有効性や妥当性を図る必要がある。学習評価の蓄積は継続して行っているが、評価結果とアセスメントを結びつける作業やアセスメント自体の書式については簡略化できる余地があり、職員のニーズや県の校務支援システムを見据えた移行が求められる。
	「個別の指導計画」に基づく自立活動の指導の充実	実態把握・中心課題の分析に基づく指導内容の工夫、専門性向上のためのバックアップ体制づくり	・自立活動の研修に関する職員アンケートを取り、自立活動の授業を「充実させることができた」「少し充実させることができた」の項目で職員の70%以上から評価を得る。	・1年間で、プレ研修を含む5回の自立活動の指導の研修を実施する。学部内でのグループ研修や各学部の実践の紹介、スーパーティーチャーからの助言や講義を得る機会を設ける。	B	・計画した自立活動の研修をすべて実施することができた。1月の研修では、オンラインを活用し、スーパーティーチャーに助言をいただきながら授業を作り上げることができた。職員アンケートでは9割以上の職員から「今後の授業に生かすことができる」と回答があった。
	授業の充実のためのICT環境の充実	ICT機器を活用した児童生徒が分かる授業づくりの推進	・児童生徒一人一台の学習者用端末の整備を進め、授業の中で活用を進めていく。	・ICT支援員とも連携しながら、職員研修を実施する。 ・授業の中で有効に活用できた好事例等を共有する。	B	・ICT支援員を講師に迎え、職員研修を4回実施した。 ・研究部と連携し、教材ライブラリを再編したり、学部会等で好事例の共有を行ったりした。
キャリア教育(進路指導)	発達段階に応じたキャリア教育	各学部段階で一貫性のあるキャリア教育の基礎づくり	・卒業までに「育てたい力」を踏まえ、各学部におけるキャリア教育の視点や取組について整理する。	・他校の先進的な取組を学ぶ研修会を実施する。	A	・全職員を対象に外部講師を招聘し、キャリア教育の基礎・基本についての研修会を実施した。各年代に応じた具体的な実践例も交えた講話は有意義な研修となった。
		キャリア教育、進路情報等に係る情報発信	・進路便りをとおしてキャリア教育をテーマにした話題を取り上げ、職員と保護者間での共通認識を図るようにする。また、幅広い進路情報を提供するために、施設見学の機会を設定する。	・学期に1回、学部毎に進路便りを発行し、キャリア教育の視点から育てたい資質や能力について積極的に発信していく。また、保護者による施設見学の機会を計画的に企画することで、積極的に進路に関する情報発信を行う。	B	・進路便りを通してキャリア教育の視点から、家庭で実践できる事例を紹介した。 ・高等部保護者向けに施設見学を2回企画した。1回目は8月に実施し、概ね希望通りの見学ができた。2回目は2月に予定しているが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となる事業所が多い。
	個のニーズに応じ	個のニーズや社会的状況を	・年間計画に基づいて生徒のニ	・福祉サービスの利用について、高	B	・年2回の高等部現場実習の前に、保護者向

	た進路指導	踏まえた柔軟な現場実習の実施、進路面談の工夫	一ズに応じた現場実習や面談等を行い、進路先を決めることができるよう支援し、また、全員を相談機関等につなぐことができる。	等部3年生保護者に説明する機会を設ける。また、一般就労の生徒も相談機関につなぐ。 ・中学部3年生の進路指導について1年間の流れを整理する。		けに、福祉サービス利用に向けた説明会を開催した。2回目の説明会は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、紙面にて資料を配付した。 ・中学部3年生の進路指導については、進路指導部職員を中心に年間を通して進路学習を実施した。
生徒(生活)指導	個々のケースに応じた生徒指導	情緒の不安定さや障がいによる困難さを抱える児童生徒への組織的支援	・支援や生徒指導が必要な児童生徒に関して、組織的に対応できるように、各学部で週に1回は児童生徒の情報交換を行い、分掌部会、支援会議につなげる。	・学部会や学部朝会で週に1回、児童生徒の情報交換の時間を設定する。全職員で一貫した支援や配慮が必要な児童生徒の情報について、全体朝会等で共有したり、支援会議等を実施したりする。	B	・学部ごとに児童生徒の情報交換を行い、職員の児童生徒理解につなげるとともに、その子に合わせた指導支援が行えるように意思疎通を図ることができた。特に必要な場合は、関係者が集まり支援会議を開くことで一貫した支援につなげることができた。
人権教育の推進	人権教育に係る授業の充実	児童生徒の実態を踏まえ、職員間の意見の交流による授業づくり・授業改善	・職員の人権意識や人権感覚を高めるために研修会、「ふりかえりチェックリスト」を実施し、学校評価アンケートの人権感覚に係る項目の評価を保護者・職員ともに95%以上にする。 ・全体研修の中でなど、職員間で意見等の交流ができる機会をつくるようにする	・人権教育に係る関係法令や多様性に対する理解を深める全体研修を8月に、「ふりかえりチェックリスト」は年3回実施する。実施後はアンケート結果について職員間で共有し、相互に人権意識を高めるきっかけをつくる。 ・11月の研修会では職員間で意見等の交流ができる機会を設定し授業づくりや授業改善につなげられるようにする。	B	・同和問題の関係法令等の理解をより深めるために、今後は実例等を取り入れ、より分かりやすい研修の工夫が必要である。 ・多様性については、具体化して示す必要があった。 ・「ふりかえりチェックリスト」は年3回実施できた。不祥事防止研修の中で班別協議を行い、人権意識を高めることができた。また、人権意識に係るアンケート評価は保護者で94%、職員99%で目標をほぼ達成した。 ・11月の研修では「内容がわかりにくかった」「班別協議の時間が短かった」等の意見が多かった。「わかりにくかったが、班で話しながら考えることができて良かった」という意見もあり、今後は協議の時間を長くとり各班で内容を深められるようにしたい。
	命を大切にす心を育む指導	自己肯定感を高め、自他を大切にす心や実践力を育	・人権週間の取組や「命を大切にす心」を育む授業実践につ	・教務部と生徒指導部が連携し6月と12月の授業や生活の中で、友達と	B	・生徒指導部と連携し、各学部の道徳や特別活動、生活(小)の年間指導計画に位置づけ

		む指導の充実	いて、学部や学級で事前に検討や共有する場を設け、指導力の向上を図る。 ・人権教育の年間指導計画の系統性についても確認する。	仲良くしたり、命を大切にする心を育んだりする指導に取り組む。 ・人権教育の年間指導計画を作成し、各学部の各教科等の指導の中で人権教育と関連する指導内容を確認する。		て、各学部で取り組むことができた。 ・「命を大切にする心」を育む指導内容が明確ではなく、内容について話し合う必要があると考える。 ・全体計画の重点目標から、人権教育の年間指導計画の内容を見直した。また、各学部の自立活動の表記の仕方を工夫した。
いじめの防止等	いじめの早期発見・未然防止に向けた取組	児童生徒の心身の状態を把握し、児童生徒への一貫した早期対応	・児童生徒の心身の状態を把握するために、児童生徒向けのアンケートを毎月1回実施する。 ・本校の児童生徒の実態に応じたアンケート等とおして、家庭での気づきや様子の変化を把握し、気づきを職員間で共有し、迅速に対応する。	・「心のチェックシート」、「心のアンケート」、個別面談を実施し、必要に応じた支援や教育相談を行っていく。 ・熊本支援学校版子どもサイン発見チェックリストを7月と12月に実施する。アンケート結果や週1回の学部での情報共有で児童生徒の状況把握を行う。	B	・中学部・高等部の生徒を対象に「心のチェックシート」を定期的実施したことで、生徒が自ら自分の心の様子について見つめる機会となった。また、6月に抜粋版の「心のアンケート」を、11月に「心のアンケート」を実施し、いじめ事案を確認でき、その後の継続的な指導につながっている。 ・熊本支援学校版子どもサイン発見チェックリストを各家庭に配付することで、保護者が子どもの様子を見直す機会となっている。
地域支援	地域のニーズに応じた支援の充実	地域の学校の実情やニーズに応じた支援及び関係機関とのネットワークを生かした支援	・巡回相談員の専門性を生かしながら各学校からのニーズに合った巡回相談員を派遣する。また、複数の巡回相談員で、県立高等学校エリア会議や熊本市小中学校ブロック会に参加する。	・小学校、中学校、高等学校等からの依頼に2人のコーディネーターで対応する。また、可能な限り2人のコーディネーターで巡回相談に対応できるようにしたり、関係機関と連携したりする。	B	・小学校、中学校、高等学校等からの依頼に専任のコーディネーターで対応することができた。コーディネーターのブロック会には、2人のコーディネーターで参加することができ、会のまとめをしたり必要に応じて助言を行ったりすることができた。相談内容によっては、熊本市子ども発達支援センターや熊本市障がい者相談支援センターと連携を図ることができた。
	校内支援体制を機能させた支援の充実	個々のケースに応じたチームによる支援の流れづくり及び校内支援委員会、関係機関と協働した実践の蓄積	・各学部で個別支援の相談担当者設ける。担任からのニーズに応じて、ケース会議や校内支援委員会等を実施し、支援の目標や方法について	・校内支援体制の流れについて職員会議で説明し、ケース会議や校内支援委員会について周知する。また、分掌部会等とおして、各学部の児童生徒の情報交換	B	1月に校内支援体制や今年度の校内支援について全職員に周知した。各学部主事や管理職と相談しながらケース会議や校内支援委員会を行った。また、継続的な支援が必要なケースについては、担任

			て具体的に検討していくシステムを構築する。	を行う。随時、教育支援部の介入の必要性について学部主事に確認する。	や学部主事と連携を図りながら、複数回校内支援委員会を行い支援方法等の検討を重ねることができた。さらに、各学部の特別支援教育コーディネーターが窓口となって関係機関との連絡・調整等も随時行うことができた。
地域連携(コミュニティスクールなど)	近隣3校及び保護者と連携した防災の取組	出水南校区防災連絡会と連携した学校間の情報共有及び保護者と協働した福祉子ども避難所運営の土台づくり	・湧心館高等学校との合同CS会議にて、近隣校の防災体制について情報共有する。また、校区防災連絡会(または自治協議会長会議)との情報共有を行う。 ・福祉子ども避難所運営については、感染防止の観点からマニュアルを見直す。	・近隣校4校の防災主任を中心とした情報共有の場を設ける。また、自治協議会長会議等で近隣校の防災体制及び福祉子ども避難所について理解啓発を行う。 ・PTA防災・安全部と協働し、感染症対策の視点での避難所運営の課題、マニュアルの改善について協議する。改善案に基づき備蓄物品の購入等を行う。	B ・学校運営協議会で緊急時の対応等について意見交換を行うことができた。また、近隣校4校の防災主任で意見、情報交換を行うことができた。 ・地域の自治協議会で福祉子ども避難所について説明することができた。 ・PTA防災安全部を中心に、福祉子ども避難所の開設訓練を計画したが、新型コロナウイルス感染症の影響で実施はできなかった。 ・備蓄品についてはPTA防災安全部で確認することができた。必要な物品の購入に向けて今後アンケートを実施する予定。

4 学校関係者評価

■学校運営協議会委員からは、主に以下の御意見をいただいた。

- ・地域の方に学校のことを気に留めていただくだけでも違うと思う。防災の観点からも、ここに特別支援学校があるということで気に掛けてもらうことが大事。
- ・近隣学校、特に湧心館高校とのつながりは、同じ県立学校でもあり、とても大切だと思う。
- ・地域の方にも学校や子どもたちの様子を知っていただく機会を作ってほしい(見学会や動画)。
- ・出水南小学校の4年生との交流活動も今年はオンラインで行われた。特別支援学校の小学部の先生方もいろいろと工夫されており、多くの学びを共有できたことに感謝している。
- ・コロナ禍で対面の交流はなかなかできないが、できれば、隣の学校でもあるので、実際にいろいろな活動を一緒にできるといいと思う。専門的知見をお持ちの先生方もたくさんおられるので本校の特別支援教育についてもご助言いただきたい。
- ・職員不足は是非熊本県に解消していただきたい。
- ・職員不足が解消され、先生方が余裕を持って教育指導にあたっていただけることを願う。
- ・学校評価アンケートを見ると、保護者の目ではほとんどの項目で80%以上達成できているということになっているのに実際現場で取り組んでいる職員の目には達成にいたっていない項目が多く見られるのは、職員の数が足りず、忙しさで思うような結果が得られていないと感じている方が多いのではないかと。職員の数を増やすよう教育委員会に進言するか、または、今いる人員で達成できる目標を探すことが大切ではないか。
- ・「アクションプラン2021」の現状で、職員の入れ替わりが多いという点が気になった。児童生徒の学習意欲や生活態度は先生との関係性によるところが多くあるように思うので、入れ替わりが少なくなれば良いと思う。
- ・コロナの影響で制約も多い中、いろいろ工夫して取組を行っておられると思います。
- ・コロナ禍(約2年)が続いていますが、子どもたちのニーズを汲んだ活動が行えていると思う。
- ・学校評価に対して、ほとんどがB評価になっているが、A評価でもいいのではないかと思う項目が多々ある。自信を持ち、さらに子どもたちの安心・安全を築いてほしい。
- ・地域の中で活動することが制限される中、開催できた教育活動がICTを取り入れたりすることに

より、今までと変わらない充実したものになっている。

- ・18時以降の留守番電話は良かった。
 - ・「命を大切にすることを育む」というのは、とても大切にしていきたい。
 - ・学校評価アンケートにおいて、進路情報提供の評価は、保護者において残念ながら高くない。進路情報のニーズは多岐にわたるため、多数に満足いただくためには個々のニーズに沿った情報の提供が必要。その提供のどこに不十分さがあるのかについて確認していても良いかと思う。保護者のみならず、職員評価でも同様の傾向を示しているため、保護者、職員の双方から探ることができるのではないかと。卒業後の進路選択はその生徒の人生を大きく左右するもの。数ある選択肢の中から一つを選び出す作業なので、以前に比べてもかなり手間暇をかけないとベストマッチングに至りにくい時代になっている。進路指導にはさらに力を入れて行かれることを期待する。
 - ・子どもたちのニーズ、ご家族のニーズを今まで以上に取り込んでいただき、さらに、そのニーズ、要望が実現するよう教職員の皆様が一丸となって学校経営をされることが一番と思う。
- 学校評価に係る保護者アンケートでは、16項目中14項目で8割を超える評価をいただき、特に「子どもたちは、健康で安全な学校生活を送っている」「教師は、子どもの人権を尊重する姿勢で指導・支援に当たっている」「熊本支援学校に入学させてよかった」という項目で高い評価をいただいた。反対に「学校は、地域資源（人・場所・ものなど）を活用した授業を行うなど、地域とのつながりを持って取り組んでいる。」「個々のニーズに応じた進路に関する情報が提供されている。」の2項目が8割に達しなかった。コロナ禍ではあるが、地域との連携は大切なので、地域と共に行える活動や実施方法を模索したり、今年度実施した進路アンケートを活用したりしながら改善に努めていきたい。

5 総合評価

■本年度の重点目標（1）授業改善・カリキュラム・マネジメント

教科の「見方・考え方」を働かせる授業づくりについて、教科部会を編成して一人1回の略案による研究授業に取り組んだ。職員アンケートでは、9割程度の職員が『教科の「見方・考え方」を働かせるための工夫を授業の中で実施することができた。』と答えており、児童生徒一人一人の力を伸ばす指導につながった。また、ICT機器を活用したことで、授業の充実を図ったり、オンラインでの交流を実施したり、新型コロナの影響等で登校が難しい児童生徒に対してオンラインでの授業を実施したりすることができた。また、自立活動の指導の充実においては、スーパーティーチャーによる助言を受けての指導等を行うことができた。自立活動の指導においては、個別の指導計画（自立活動）の作成の手順が定着しつつあり、個々の児童生徒の実態を分析的に捉え、それに基づいた目標設定のもと指導することにつながった。今後は、更なる専門性の向上、学びの連続性や個々の児童生徒への連携した支援等についても組織的な改善が必要である。

■本年度の重点目標（2）安心・安全、魅力的な学校づくりについて

児童生徒の指導・支援においては、日常的にチーム内で情報共有し、丁寧に対応することを徹底して行った。具体的には、学部朝会での児童生徒に係る情報共有、校内支援の充実、保護者との連携等である。学校評価アンケート（保護者）では、安心・安全な取組に係る項目で「そう思う」「ほぼそう思う」を合せると9割以上の評価を得た。学校運営協議会委員からも児童生徒を中心に据えた保護者との信頼関係に基づく指導・支援について評価いただいた。一方で、地域とのつながりや情報発信については、様々な場を捉えて充実させていく必要がある。

■本年度の重点目標（3）職員が一体となった校務改革について

職員数が不足する中、連携して校務に当たることができた。学校評価アンケート（職員）の結果に基づいて担当部署ごとに対応を進めたが、職員一人一人の“学校全体で校務改革に取り組んでいる”という評価は4割に留まっている。今後は、職員一人一人の意見を取り入れつつ、職員の参画のもとによりよい職場づくりに向けた改革を進めていく仕掛けが必要である。

6 次年度への課題・改善方策

【児童生徒一人一人を大切にしたい魅力ある学校づくり～地域とともにある熊支～】

・次年度も安心・安全な学校づくりに真摯に取り組んでいく。そのために、まずは、取組の日常化を図り、年度途中で評価・改善する（日々の児童生徒の情報共有や保護者との連携、校内での連絡体制、引継ぎやケース会議等）。また、保護者や地域の方々とともに美化活動や登下校時の見守り等を行うなど、日々の学校づくりへの参画を仕組んでいく。

【専門性を高め質の高い授業実践～高め合い支え合うチーム熊支～】

・特別支援教育に係る基本的指導力の向上、更には授業の質の向上に向け、学校組織として計画的に取り組んでいく必要がある。職員研修においては、基礎研修、キャリア別研修、選択研修等、現状とニーズに応じた研修計画を全職員の意向を反映させて作成し実践する。特に授業づくりにおいては、外部講師招聘による授業研修、一人一事例によるポスターセッション等を行い、本校のカリキュラム・マネジメントを職員相互の学び合いのなかで深化させていく。

【こんな学校に！職場に！～職員一人一人のアイデアから変わる熊支～】

・一部職員に超過勤務が常態化している現状を組織的に改善する必要がある。次年度は、全職員から改善のアイデアを吸い上げ、校務改革の取組を見える化する。